モンゴルを目指した王仁三郎の夢

～光り輝くアジアの世紀を目指して～

出口王仁三郎聖師は、大正 13（1924）年２月から５カ月間にわたり、数人の従者を連れてモンゴルへと向かいました。大草原を自ら馬で疾駆した王仁三郎聖師。その最終目標は、中東のエルサレムだったと言います。王仁三郎聖師はその時、何を思い、何を目指していたのでしょうか。

大正日日新聞の買収と大本弾圧

モンゴルは、日本の国土の４倍でありますが人口は３１８万人です。そのうち、首都のウランバートルには、全人口の半数近い、約１４０万人が住んでいます。宗教はチベット仏教で、大本とも交流のあるガンダン寺院というチベット仏教の総本山があり、その宗教を信仰されている方がほとんどです。

出口王仁三郎聖師がモンゴルを目指したのは、大正13（１９２４）年のこと、モンゴルが旧ソ連の強い影響を受けながら社会主義国家を樹立するころで、政治的にもたいへん不安定な時代でした。

その頃、王仁三郎聖師は、日本国内において大本の宣教運動を全国的に展開していく中で、大正９年に大正日日新聞社を買収します。大正日日新聞は、当時48万部の発行をしていました。同じ時期に朝日新聞が44万部程とのことですから、この大正日日新聞買収の影響力というものは大変大きいものがありました。しかも、軍人や知識層の人々が次々と大本の思想に賛同し、教勢は飛躍的に伸びていきましたので、その大本の教勢と影響力が、当局を刺激し、大正10年、大本は弾圧（第一次大本事件）を受け、王仁三郎聖師は未決へと収容されたのでした。

「天の時なり」モンゴル行きの大決心

大正13年２月、王仁三郎聖師は仮釈放中の身であり、国外はおろか他県へもゆくこともできない状況であったにもかかわらず、突如、日本を脱出し、密かに大陸に渡りモンゴルを目指します。

モンゴル進出の目的について、「東亜の天地を精神的に統一し、次に世界を統一する心算なり、事の成否は天の時なり、煩慮を要せず、王仁三十年の夢今や正に醒めんとす」と述べています。さらに、モンゴル行きを決心したきっかけとして、「大正十年二月十二日、陰暦正月五日、晴天白日の空に上弦の月と、太白星は白昼燦然として浪花の空に異様の光輝を放ち、天地の変動を示している。この日、日出雄（出口王仁三郎）は大阪市の玄関口梅田駅頭に、大正日日新聞社長として社務を総理していた。（中略）下って大正十三年二月十二日、しかも同日の天空に楕円形の月と太白星が白昼燦然と輝き出した。

日出雄は天空を仰いで去る大正十年の二月十二日を追懐せずにはおられなかった。しかも満三ケ年を経た同月同日の白昼に、天空に同様の異変あるは決して只事ではあるまい。いよいよ自分が神命を奉じ万民救済のため、人類愛実行のため、天より我にその実行を促すものと考へたのである」（『霊界物語』特別編）と述べています。

そのような大決心を抱きながらも、長女の出口直日（大本三代教主）には別の一面を見せています。その時の王仁三郎聖師の様子を三代教主は、「蒙古入りに際し、私に告げるに随行の人に変わらしめ、ご自分はたまたま傍にあったひもを幾度となく指に巻き付けてという気の弱い方でした。それでいて胸の内には思いもよらぬ想起を抱かれたのです。人間としては至って優しいという方が神さまのみ旨となると勇猛に行動されました」と述べています。

未開の地へ飛び込もうという王仁三郎聖師に対し、さすがの役員も取りやめるように促しました。ところが王仁三郎聖師は役員に対し、「君は神業ということが分かっていない。このことは天の時であって神さまがこういう形で話を持ち込まれたので、今この瞬間において行かなければ本当に神さまの経綸というものが進まない」と説得し、その日のうちに大陸へと出発しました。

日本男子の品は落さじ

大陸へ渡った王仁三郎聖師は、当時の満州国にあった大本の奉天支部で約20日間過ごします。その時に現地の馬賊・盧占魁（ろせんかい）将軍に出会います。盧将軍は易占や観相学にたけていて、王仁三郎聖師を密かに研究していくうちに、大偉人であるとの結論に至り、とうとう心酔し切ってしまわれます。それにこたえるように、王仁三郎聖師は随所で奇跡を起こしました。病気を治したり、雨の降らない時期に雨を降らせることもありました。そうするうち、最初20人ぐらいだった集団が最後の方には千人ほどにふくれあがっていったのです。

王仁三郎聖師が中国に入ることができた大きな理由の一つとして、道院との提携を結んでいたことが挙げられます。道院の宣伝のためなら中国全土を広く回ることに支障はありませんでした。

しかし、王仁三郎の影響力が大きくなっていくと、盧将軍の上司にあたる中国の軍閥政治家・張作霖が危機感を持ちはじめました。そのため大正13年６月21日深夜、王仁三郎聖師一行６人はパインタラの地で囚われの身となり、処刑されることになりました。

『よしや身は蒙古のあら野に朽つるとも日本男子（やまとおのこ）の品は落さじ』

～21世紀・生きがい講座～

鬼塚（おにつか） 義彰（よしあき）（大本本部総務課主事）

『いざさらば天津御国（あまつみくに）にかけ上り日の本のみか世界を守らむ』

『日の本を遠く離れて我は今蒙古の空に神となりなむ』

処刑に際し、辞世を覚悟して王仁三郎聖師が詠んだ歌です。

機関銃による処刑が今まさに行われようとしたときでした。不思議なことに、すべての機関銃が次々に故障、処刑は中止となりました。そのうちに、この遭難が日本領事館に知れることとなり、王仁三郎聖師らは死刑を免れ、全員、日本に強制送還されることとなりました。

エルサレムへの布石

王仁三郎聖師がモンゴルへ出発するころは、第一次大本事件の報道のため「大本は邪教」と言われていましたが、無事、生還し帰国すると、今度はうって変わって、多くの人々の出迎えを受け、マスコミが殺到しました。まるで凱旋をした将軍を出迎えるような、大きな歓声が上がったと、当時の記録に残っています。

パインタラでの遭難でモンゴル訪問は失敗に終わったように見えるのですが、王仁三郎聖師自身は、モンゴル訪問は大成功だったと言っています。

成功と言ったのは、モンゴル訪問が、すべて神の仕組みだったからだというのです。これは、全てのものには水の流れのようなものがあって、その流れの拠点を抑えていく、それが仕組みだと言っています。例えば、私たちの身体の中にも血流がありますが、コリをほぐさないと血流が良くなりません。それと同じように地球の中にもいくつもの霊流があって、そうしたツボにあたる拠点を抑えていくことが仕組みなのだというのです。

帰国前、現地での事情聴取の中で、蒙古独立の企ての有無を聞かれると、

「自分は支那の新宗教『道院』の宣伝使だ。蒙古の地に宗教を宣伝する特権を持っている。そうして蒙古の国と言ったのは別に深い意味があるのではない。我々、日本の国には八十余個の国名があり、丹波の国、丹後の国、山城の国などと小区劃に国名を呼んでいる。

そうだから支那の一区域たる蒙古を蒙古の国と書いたのだ。自分は蒙古のみならず、新疆、印度、西蔵、支那はいうにおよばず、ロシア、シベリアを経てヨーロッパの天地にまで宗教的王国を建設するのだから、小さい蒙古などに執着しているのではない。そうして宗教は国境を超越しているのだ」（『霊界物語』入蒙記　黄泉帰）

と述べています。王仁三郎聖師はモンゴルが最終目的ではなく、さらにその先にはエルサレムへと続いていました。その布石ともなるのが、モンゴル訪問であったのです。

モンゴル国営放送で王仁三郎聖師を紹介

王仁三郎聖師のモンゴル訪問から80年、仕組みが大きく展開しました。２００４年６月19日、聖師モンゴル訪問80周年を記念して、出口紅五代教主と共に１７７人がモンゴルを訪問しました。チベット仏教の総本山・ガンダン寺院との共同で「世界平和祈願祭・万国万霊合同慰霊祭」を執行したのです。

それを契機として、２００９年６月９日には、モンゴルのグチンウス村で、世界連邦都市宣言が行われました。モンゴルでは第１号となります。２０１６年８月20日には、ムンフハーン村において第２号都市宣言が行われました。

世界連邦は、世界の国々が互いに独立を保ちながら、世界規模の問題を平等に扱う一つの民主的な政府を作るということを理想としています。日本では昭和25（１９５０）年10月14日に京都府綾部市が第１号の都市宣言をしています。第２号は同じく京都府の亀岡市です。

モンゴルの国営放送ＭＮＢで王仁三郎聖師のことが紹介されました。それは、日本の宗教の一つである大本の創立者・出口王仁三郎の思想は、当時の一般の日本人だけでなく、文化人、軍人にまで影響を及ぼしたことや、アジアを精神的統一するために自ら命をかけてモンゴルを巡回したことなどが紹介されました。

今、モンゴルはわずか３００万人の人口の中に、海外から１００を超える宗教・思想団体が入ってきていると言われています。この勢いにモンゴル政府は、少ない人口であることから、モンゴルの文化、歴史が薄らいでしまうのではないかという危機感を持っています。そんな中で大本は、２０１０年12月にモンゴルでの宗教法人格を取得してから、「世界宗教デー」や「世界平和デー」といったモンゴル宗教界における国の公認行事に招聘され、その活動は一定の評価を受けており、日本を代表する宗教団体として認めていただいていることはありがたいことだと思っています。

これからも、モンゴルの方々とともに、出口王仁三郎が理想とした、民族・宗教・国家などの違いを超えた連帯・協力による、真の世界平和秩序の実現に向けて努力していきたいと思います。

掲載文は、平成30年６月20日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑秋季大祭

大本東京本部開設50周年記念、東光苑秋季大祭・新穀感謝祭・七五三詣りは11月11日、午前10時30分から、斎主・出口眞人氏のもと執行され、386人が参拝。祭員は関東教区各主会の祭務部長他、少年祭員は東京主会の小谷遼くん、玉置巴さん、伶人は二絃の会関東支部、大本神諭拝読は、小林龍雄神奈川主会長、添釜は茨城主会が担当した。

祭典後、大本神諭拝読につづき、東京本部開設50周年に寄せての教主さまのごあいさつを、猪子恒東京宣教センター長が代読（一面掲載）。ついで鈴木穎一大本本部長があいさつに立ち、10月に執行された東京大本歌祭での各主会からのご奉仕に謝意を述べた。また「厳の郷」整備事業の前期完成祭の様子などを紹介。続いて七五三詣りのお子さんに鈴木本部長から千歳飴が贈られた。

続いて斎主の出口眞人氏が、東京本部在籍時の思い出や、同じく開設50周年を迎えた大本梅松塾の思い出などを交え、東京本部開設50周年の祝辞を述べた。

引き続き二絃の会関東支部による八雲琴『伊勢詣』が奉納された。

八雲琴の奉納『伊勢詣』

この後、出口眞人氏、鈴木穎一本部長、猪子恒センター長、飯田俊明総代、島貫光喜総代により鏡開き。参拝者一同の「よいしょ、よいしょ、よいしょ」の大きな掛け声とともに、晴れ晴れしく開かれた。

また、開設50周年を慶祝して、教主さまから東京本部に、教主さまお作・粉引茶盌「東の光（あづま）」（熊山土・梅松館木の花桜釉）のご下附があり、ギャラリーおほもと（東光苑）で、先の東京大本歌祭に際し拝受したお茶杓「同胞（はらから）」（月山不二の松材）とともに展示された。

この後、直会にあわせて園遊会を開催。1階ピロティーでは「この花桜」の樽酒と各主会からの献酒が振る舞われ、2階講座室と食堂では「美味いもの市」として、茶そば、タコ焼き、焼き芋、笹かまぼこ、ケーキなどを楽しんだ。また「子ども縁日」では綿飴が配られ、射的や輪投げ、お菓子のつかみ取りなどが催された。

東光庵では、お茶菓子に金龍餅を取り寄せて呈茶席が設けられた。

家庭平安祈願祭

家庭平安祈願祭（27回）は、10月27日午前10時30分から、斎主・高野春樹祭務課長のもと執行され、43人が参拝した。

祭典では、斎主と祭員が全国から申し込まれた450件の氏名を全て読みあげ、家庭の平安と繁栄を祈念。

祭典後、東京本部を代表して、猪子恒東京宣教センター長があいさつした。

なお全国から申込まれた家庭平安祈願は、祭典後一週間、東光苑神前で継続された。

21世紀・生きがい講座

第188回「21世紀・生きがい講座」は、10月17日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、山田歌大本本部総務課長が、「道院と大本の出合い～提携95年の歴史に学ぶ～」と題して講話した。参加者は33人（内、一般7人）。

山田講師は、「中国済南で発祥した道院と大本には奇びなご縁がある」として、提携以前から霊界物語に「道院の祭神である至聖先天老祖様は、国常立大神様である」と、聖師さまが示されていたことに振れながら、現在にいたるまでの両教団の交流の歴史を紹介。「道院との提携は、世界平和への大きな鍵となるのではないか」と語った。

参加者からは「聖師さまは宗教間対話、世界市民の思想の先駆者だと再認識しました」（男性・一般）等の声が寄せられた。

東光苑祭典・行事予定

12月

9日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭
※当日、天声社の出張販売があります。左の亀岡本社へ事前に注文しておくと便利です。
TEL 0771（24）7523
FAX 0771（25）3655

16日（日）午前10時30分執行
開祖聖誕祭（182年）

19日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題 皇道大本と二度の弾圧
～光明世界を見すえて～
講師 猪子 恒（東京宣教センター長）

25日（火）午前10時30分執行
出口日出麿尊師毎年祭（27年）

1月

1日（祝・火）午前7時執行
新年祭・年賀交換

1日～3日（火～木）午前9時30分から
年賀

7日（月）午前10時30分～午後3時
東光苑七草粥

13日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・成人式式典

16日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）

19日（土）午前10時30分執行
聖師毎年祭（71年）

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.com